

国際情報

INTERNATIONAL & INFORMATION

新潟国際情報大学広報 第6号

〒950-2292 新潟市みずき野3丁目1番1号 tel 025-239-3111 fax 025-239-3690 E-mail somu@nuiis.ac.jp ホームページ <http://www.nuiis.ac.jp>

「心で見なくちゃ、見えないよ」

情報センター長 高瀬 昭治

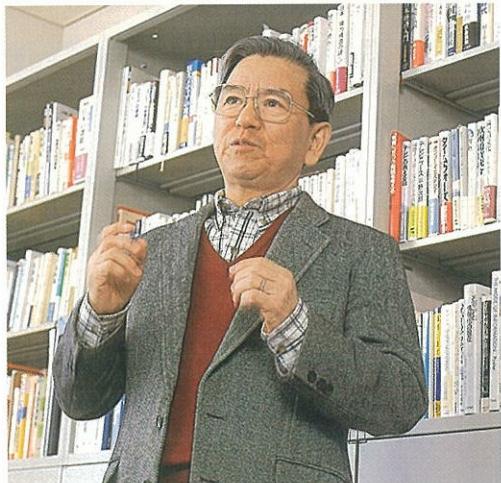
か見えない、どうの言つ回しは、私は、「情報は何か」を考える糸口を与えて貰うように思えます。

「情報の意味は、般に「みえないもの」、「みえにくるもの」を、「見えるもの」として明確に経験させてくれる「いつ」とある」と説いたのは見田宗介さんです。私たちは、回りにあるモノや現象に名前を付け、その相互関係を分析することによって、そのモノや現象の見えない本質・法則ともいってべきものを認識する事が可能になります。見えないものを、一連の記号を使って、見えるものとして経験する。それが情報化としての認識作用です。

見田さんは、情報を二つの様相に分けて説明します。一つが、いまあげた社会や自然を知るために情報つまり認知情報、知識です。第二は、社会や自然に働きかけるために指示を与えるプログラム、設計・行動情報です。この「つばさむれも何かをするための手段としての情報」です。

私が興味を持つのは、彼が第二の情報としてあげた、「歎び」とこの情報です。これは、何かの手段としての情報ではなく、それ自身が歎びであるような自己充足的な情報です。一例をあげれば、すばらしき絵画や音楽や文学が、その物質的存在を超えて、私たちに直接体験として与えてくれる歎び、つまり美的体験情報がそれです。

魂の深いところで、私たちの知性と感性に至福の歎びを満たしてくれる自己目的的な情報——。手段としての情報にしか目を向けない私たちの貧しい情報観に対して、王子さまが「目では見えないよ。心でさがさないとね」といった何からは、こうした物質主義的彼方にいる、魂をゆするような高品質の情報ではなかつたのでしょうか。



地域交流 活動について

地域交流委員長

渡辺忠

地域社会が大学に求めるものは3つあるといわれています。1つは地域住民に門戸を開放することで、2つ目は大学が所有する施設、設備、人材などを地域のために有効に活用すること、3つ目は教育研究の内容を地域社会の一テーマに合わせることです。一般に大学はこれらの要求に公開講座、施設の開放、社会人の受け入れ、民間との共同研究、委託研究、委員会や審議会への参加などの活動を通して応えようとしています。

開放しようとします。交流活動は着実に実績を積み重ねているように見えます。しかし、社会人の受け入れについては、入学制度、聽講生制度は整っていますが入学実績はわずかです。施設の開放も緒についたばかりです。共同研究も教員個人またはグループのレベルにとどまっています。大学開放などもなう管理や経費の問題も障害になっています。

少子化による入学者の減少は避けられないでしょう。また放送大学や、インターネット等の普及は大學以外のところで高等教育を習得する可能性を増やしています。しかし一方では高等教育の普遍化、生涯学習の高度化、多様な経済活動を支える知識基盤の必要性など社会はますます高度な教育を必要としています。大学は地域社会の一員を的確にと

「情報システム特論」 を市民に公開

情報システム学科3年向け講義である「情報システム特論」を公開講義として市民にも開放した。こ

公開講座「情報文化入門」を50名が受講

本学は10月8日から7回の日程で公開講座「情報文化入門」(木曜、午後7:00～9:00)を万代市民会館で開いた。本学の学部名である「情報文化」を地域の人々に理解してもらい、大学の存在意義をアピールすることが目的である。情報文化を説明するには情報技術が生み出す文化という視点で語ると理解が容易である。そこで「生活の中の情報技術」という副題をつけて、情報システム学科の先生方が講師を分担した。

全7回の内容と講師は次のとおり。

第1回	資源としての情報	高木義和
第2回	21世紀はネットワーク社会	永井武
第3回	インターネット社会の光と影	宗澤拓郎
第4回	生き残りをかけた情報システム	竹並輝之
第5回	人に優しい情報機器	大山毅
第6回	身近な人工知能	樋口光明
第7回	仮想世界のルーツ	渡辺中

40名の募集定員に対して、50名を超える市民の応募があり盛況であった。



ウーマン・カレッジ 開催で地域と連携

が自主的に立案・運営している。「一九九七年度から開催されている「ウーマン・カレッジー・ン西蒲・燕」は三回の講義を二年計画で行うもので、新潟市西部から燕市にかけての地域と大学の密着な連携をはかることも目的とされている。本年度は、6月から11月にかけ、土曜日に10回本学大教室で実施された。メインテーマとして「今、変わるとき・変えるとき」と掲げ、既存の男女のパートナーシップを女性学の視点から見つめなおすための講義を組んでいる。講義のほぼ半数を本学の専任教員が担当し、他は各分野の研究者や専門家を学外から招聘している。参加者は一年目から三五〇名を超えて、専門的な内容にもかかわらず、講義の後半は常に活発な質疑応答の時間がとなっている。

産学交流の会施 視察実

産学交流の 視察会施

11月4日(水)、企業との就職懇談会が新潟市のホテルにおいて、190の企業から213名が参加され盛大に開催されました。

大学からも学長、学部長、就職指導委員はじめ多くの教職員が出席、広い懇談会場では「グリフスを片手に」する間もなく、「名刺を片手に」いたるところで教職員が企業の人事担当者と真剣に話し合つ姿が見られました。

不況による採用の手控え等厳しい話題の多い一方、少數精銳を本学の学生に期待する声も聞かれました。兎に角、「全てに積極的」な人間を求めていたことは、間違いないようでした。

5周年記念 開学 講演会

e-ビジネスと
企業経営(要約)

日本アイ・ビー・エム(株)

代表取締役社長
北城 恵太郎

クを使って、どう企業経営を変えて行くかというのを話ししたいと思います。まず、ロービジネスとはどんな仕事の進め方なのかをお話しし、次にそれによりどのような事業改革が行われるのか、それを支える情報技術はどうのようなものかをお話しします。

工業化社会の進展のなかからデジタル革命が起り、さらに新しい情報化社会が始まるとしています。情報を企業活動、あるいは個人の生活のなかに活かしていく社会、いっても「じ」でも、だれでも情報に接することができる社会が情報化社会です。この時代の新しいきっかけを作っているのがインターネットです。インターネット接続の「ノード」は毎年倍増しており、現在3000万台以上が接続されています。利用者数でいえば、5000万人を超えるでしょう。この新しいメディアは、すでに社会基盤になろうとしています。(「ジオが5000万台に達するのに38年かかり、テレビは12~13年かかりました。インターネットは5年で」とまで来ました。) ディアが社会に大きな影響を与えるレベルは、500万台だとされています。まもなく会社、銀行商店、家庭などいろいろなところでネットワークが使われ、ネットワークが前提となつた社会がやつくるでしょう。

企業についても、大きな影響があります。今まではすでに企業内に存在する仕事を、いかに効率よく早く、安く行うかに情報技術が使われてきました。これからは、すでにネットワークがあり、それにつけたパソコンを多くの人が使っていることを前提にして、ネットワークを使った新しいビジネスを

う進めるか、また個人が快適な生活を送れるようにするにはどうしたら良いのかを考える時代であるといえます。これは従来と根本的な違いであり、産業界にビッグバンをもたらすものだと思います。それでは、ネットワークを利用した新しいビジネスがどう展開しているのか、いくつかの事例をもとにお話しします。



では、設計情報を開示して調達先に改善提案を求めています。こつすることにより、仮想企業集団が購買コストの削減に成功しています。クライストークは、インターネットで部品調達を行うことにより、自社製品の販売在庫情報を、ネットを通じて刻々と把握することにより、適切な生産計画を作り、在庫回転率を上げる方式が新しい流れですが、これもネットワークがあればこそ可能になったといえます。社内業務のネットワーク、すなわちイントラネットにも大きな変化が生じてきました。IBMの事例でお話します。IBMでは、10年前に電子メールを導入し、情報伝達のスピードアップに効果を発揮してきました。さらにチームでの仕事の効率を上げるために、1995年にグループウェア（ロータスノート）を導入しました。これによりグループ全員に簡単に情報を伝えることができるようになり、情報の共有が進み、また部門を移していく仕事の決裁やの生産性が上がるなどの効果も出てきました。このようにこのツールのよどみ、営業マンがノートパソコンと携帯電話をもたせ、会社に来ないで、自宅でも客先でも、サテライトオフィスでも仕事をしてよいと先でも、サテライトオフィスでも仕事をしてよいとワークを通して自分のパソコンに送られるところが組が必要になります。これで、営業マンが客先を訪問するためには、仕事に必要なすべての情報は、ネットワークを通して自分のパソコンに送られるところが組が必要になります。これで、営業マンが客先を訪問する時間が3割向上しました。このように、ネットワークに適した仕事の仕方をしないと社内の風組はどうどん変えてても良じて、どう社風がないといふ電子的システムがあつても会社は変わりません。一方、いくら社風があつても、うまいシステムがなければ、会社は変えられません。

次に、ヨーロッパを通じて大量に発生するデータのなかから、いかに価値のある情報を取り出すかが重要です。大量的データの分析に人工知能を利用する研究やケーティングを可能にするデータマイニングの研究が進んでいます。バーベイントン・コンピューティングと並んで、家電、ソロなどによるところ、あらゆるものをネットワークにつなげる技術、パソコンをだれにも使える道具にする音声認識、体に装着できる「ヒューマン・インターフェース」の研究なども急速に進むでしょう。

日本でもネットワーク社会が着実に広がってきていますが、いくつかの課題もあります。通信回線の低価格化、暗号化などのセキュリティ技術の確立、ハック対策の強化などの問題がありますが、インターネットを使う人が使い出して、「これが社会に大きな影響を与えるのは、あと数年のことだと思います。そうなると、ネットワークの存在が市場になります。経営者は、ネットワークを使って「どういう仕事をするかを考えねばなりません。これは経営革新です。これができないと、新しい時代の変化をチャンスとして生かすことはできないでしょう。異業種の新規事業に参入することは、「ゴールド・フジシユで金を掘当てるぐらいい難い」と思います。それよりも本業の分野で、ネットワークを使っていかに経営を強化するか、新しい市場を拡大するか、業態をどう変えるかが新しい経営課題だと思います。将来どう変化するかは、なかなか判りません。したがって、変化の兆を見つける時に、いかに早く行動できるかが今後の企業の競争力になるのではないかと思います。それを支えるものは情報技術ではないかと思います。(本稿は、10月30日に万代市民会館で約280名の参加を得て行われた開学5周年記念講演会の講演要約です。文責・広報委員長)

外習記

学実体験

「実践的な知識を体得!」

情報システム学科3年 木戸 本晴

(実習先 新潟市立図書館)

私が私の参加した学外実習の内容を振り返ると、私は常に大きな反省をしなければならなくなります。私は学外実習の受入先である新潟市立図書館より、図書館のオンラインシステムのモデルの作成を実習の課題としてだされました。私は情報システム学科の学生としてこうした問題について多くの知識を学んできましたが、この課題の作成に当たって体どうして良いのか全く見当がつきませんでした。学んだ知識と現実に存在するシステムとをつきあわせることを怠り、ただ漫然と講義を受け入れてきたためであつたと思います。

我々学生どものは、純粹な学習の場としての大学に身をおいていたため、一般に実際の活動と乖離しがちになり易いという傾向があるように思われます。我々の多くは社会における企業活動などに直接触れることが少なく、あつたとしてもその多くはアルバイト等のごく限定された形での接触に留まっています。従つて私が今年参加した学外実習は、企業活動への直接の参加、接触という体験を通じて、その事実を認識させ、より実践的な知識を得る必要性とそのための方向性に対して目を開かせてくれた貴重な学習の機会があつたと考えています。

「学外実習を振り返つて」

情報システム学科3年 野村美由紀

(実習先 新潟交通)

私の実習先は新潟交通でした。実習内容は、実習期間の2週間、新潟空港へ行き、アンケートをとり、それをレポートにまとめるといったものでした。簡

單なようですが、実際、大変な仕事でした。知らない人に答えてもらひうのか。慣れるまで時間もかかりました。普段なかなか経験のできるものではないので、終わってみると充実した2週間でした。その後のレポート作成も、今まで習得したもの十分生かせるものでした。また、就職という卒業後の進路について、不安でいっぱいでしたが、実習に行つたことで、少し不安を取り除けたように思います。行き先により、実習内容も異なり、そこで得るものも違うことは思いますが、企業の雰囲気を感じ、仕事とは何か、働くとはどういうことなのかなどを知り、経験することは、必ず自分のためになるはずです。私にとって、学外実習は良い経験となりました。

「味の素の味」

情報システム学科3年 山田一洋

(実習先・味の素)

私は平成10年8月3日～8月14日までの2週間、横浜の川崎市に所在する味の素(株)川崎工場の生産技術研究所に研修生としてお世話になりました。川崎工場は大規模な施設で味の素やほんだしなどが生産されていて、多くの人が働いていました。私が研修した生産技術研究所では工場内の情報システムの運営や工場・従業員の管理などの業務が行われていました。

私の研修2週間はあつたという間でした。始めの一週間は工場内・外の施設見学をしました。ほんだしが出来るまでの過程や新商品を開発するための実験室などを見せてもらいました。また、残りの一週間は実際の業務の補助的な手伝いをしたり、会議等に出席させていただき、会社のしくみを体験することができました。また、最終日に研修の結果報告をプレゼンテーション形式で行わせてもらい前に出でた話し方などを学ばせていただきました。

この他にも社員の方々から貴重なお話を聞いて自分の就職についての方向性などを知ることが出来ました。このように私の学外実習はとても実のあるもので、普段体験できないうまいして体験でした。

「学外実習を振り返つて」

情報システム学科3年 田沢葉子

(実習先・博進堂)

私は商工会議所の業務を検定試験以外知らず、とても興味を持ったので実習先に商工会議所を選びました。

2週間の実習を終え、商工会議所の今まで知らなかつた多くの業務について知ることができました。

2週間とはいえ初めて知ることばかりで一日一日があつた間に過ぎました。中でも調査課で会議を観学できこと、受付業務を体験できたことはとてもよい経験になつたと思います。また、女性の職員の方々が何度もお茶や「コーヒーを出して下さった事に少し驚きました。しかし、般企業では以前のこのよつね経験がどこかても有意義な2週間でした。

また、大学では学ぶことのできないこのような実習体験を通じて大学で習得したものを実際の職場で発揮できるかを確認し、職業人・社会人としての自覚を身につけることを目的としたこの学外実習に参加して良かったと思っています。

「出版社の仕事」

情報システム学科3年 渡部浩嘉

(実習先・博進堂)

私は、今年の夏に学外実習として新潟市にある、博進堂という会社に行きました。この会社は出版、印刷をおこない、その他にも様々なイベント企画／運営をしています。この会社の出版物のつに、学校の卒業アルバムがあります。卒業アルバムについては、全国でシェア一位を占めており、もっとも力をいれています。以前から、出版の仕事に興味をもつていたこともあったので、私はそこで、出版の仕事がどのように行われているのかを学びたいと思いました。

新潟にいくつかある博進堂の事務所の中で、私が派遣された先は、博進堂「ミニケーション事業部」という所でした。私は今まで、出版の仕事について、出版物を印刷するだけだと思っていましたが、それだけでは会社を運営していくことはできないということがでした。博進堂は、イベントの企画／運営もしている仕事なので、卒業アルバム専門の制作部もあります。以前から、出版の仕事に興味をもつっていたこともあったので、私はそこで、出版の仕事がどのような行われているのかを学びたいと思いました。



**一足早く社会を学ぶ
~国際情報大生、当所で実習体験~**

学校では学ぶことのできない実習体験を通して学校で習得したものを実際の職場で発揮できるかを確認し、職業人としての自覚を身に付けることを目的とするインターンシップ制度の導入例が増加しています。

新潟国際情報大学では、地域社会や産業界との積極的な交流を推進する中で特色ある学校作りの一環としてインターンシップに取り組んでおり、8月17日～28日の2週間、公的機関や企業等において約30名の学生が、夏季実習として実施しました。

当所の受入れは、今年で3回目となり、今年は本人の希望により同大学情報文化学部・情報システム学科3年生の田沢葉子さんが実習しました。

実習後の感想は「商工会議所の業務は検定試験以外知らなかった。初めて知る事が多く、とても良い経験でした」とのことでした。

「長靴をはかなかつた私」

情報システム学科3年 田村 恵

(実習先・日本海水産研究所)

私は、水産庁の研究所である「日本海水産研究所」

ところどころに、約2週間程実習を行つてきました。

実習に行く以前、私はこの研究所が一体どのような活動をしているのか、全く知りませんでした。ただ

名前から察するに、「魚の研究でもしているのだな」と思ひ、いくつもの水槽の中で魚が飼育されていて、

その周りを白衣を着た研究者達が、三角フライスで

も持ちながら、私などでは全く計り知れない超専門

的な研究に勤しんでいたのだな、と思つてしました。

正直、「情報処理の実態」という、実習目的とは、な

んの関連性もないのではないか、と不安に思つたも

のです。「私服で大丈夫かな?長靴持ってきて下さい、

なんて言われてないしなあ…」半ば、魚市場に行く

ような感覚で、研究所に足を踏み入れた私は、面食

らつてしましました。

私が研究所で行った実習を挙げると、気象衛生「NOAA」受信システム、NPS-I-1画像処理、NOA

A画像のホームページ化、等温図・海況摸式図作成(D

OS画面にて操作)、統計的情報処理、データ入力と

年齢判断、魚体の体長のデータベース作成、図書検

索などです。

実習にしては十分すぎる位中身の濃い内容でした。おまけに、毎日担当の方が付いて、丁寧に教えてくれるのです。担当の方はどなたも本当に良い方ばかりで、実習の最終日には、お別れが寂しく感じました。来年、学外実習を希望する学生にも、是非日本海水産所で実習してもらいたいと思います。今我々が学んでいる知識が、社会でどのように使われているのかが、身を持つて体験できるといひでしょ。

「自分を見つめ直すことができた」

情報システム学科3年 土田 和幸

(実習先・東芝ホームテクノ)

私はこの2年半の間、これといった目標もなくただ漠然と勉強してきたよくな気がしてならないかった。

しかし自分の心中では、このままではいけないという気持ちがあつた。そんな時、ちょうど学外実習があり、実社会への好奇心と自分を変えるきっかけになればと思い参加した。私は一日目にして、実社会の企業の厳しさと、いかに今の自分に力がないかということを思い知られた。今まで本当に時間を無駄にしてきたような気がして悲しかつた。しかし、大学を卒業してすぐに仕事ができるわけではなく、企業でつづけ勉強して一人前へとなつて行くのだと企業の方に言われ少しホッとした。

学外実習を終え、やつと自分の進むべき道が定まってきた。卒業までの残りの時間に大切にし精一杯がんばって行こうと思う。本当に良い経験をすることができた。

この度本学の奨学生が次の通り決まりました。

この制度は学業のみならず、課外活動等の活躍、また卒業後も同窓生として活躍が期待できると思われる2年次以上の学生を対象に教職員の推薦により決まるものです。

この度本学の奨学生が次の通り決まりました。

この制度は学業のみならず、課外活動等の活躍、また卒業後も同窓生として活躍が期待できると思われる2年次以上の学生を対象に教職員の推薦により決まるものです。

この度本学の奨学生が次の通り決まりました。

この制度は学業のみならず、課外活動等の活躍、また卒業後も同窓生として活躍が期待できると思われる2年次以上の学生を対象に教職員の推薦により決まるものです。

この度本学の奨学生が次の通り決まりました。

卒業生のり

先生お元気ですか?
連絡が遅くなりまして
申し訳なく思つております。
す。本日より、やっと自

分のメールアカウント
を持つことができました。

(トヨタ電機総設勤務 林 公市)

さて、近況報告ですが、私は現在、芝浦新潟事業所でd-MAG-ICというツールを使って、主に、企業の販売管理システムの印刷処理プログラムの開発を担当しております。恐らく今年一杯は印刷などのバッチ処理プログラムの開発がメインになると思います。d-MAG-ICはC言語やVBと違い、コードの記述がほとんどありません。その代わり、どういった風に処理が流れているのか、自分でコードを追うことができないので、C言語やVBしか扱ったことがない人には少々抵抗があるかもしれません。まだまだ、分からぬことはかなりですが、幸いにも、新潟事業所には大変優れた技術と知識を持つた先輩方がおられるので、がんばるしかないという感じです。先生も体に心を付けて、がんばって下さい。では、またメールします。

（芝浦勤務 横山祐樹）

私は今、大学を卒業し営業職に就いています。一見大学で学んだことに直接関係していないと思われるでしようが、そうではありません。確かに講義の内容は今の仕事に直接関係していないものもあるかもしれませんが、何より新潟国際情報大学では、聴いてるだけの講義ではなく、数人で集まり何かについて討論したり、またその結果をいかに分かりやすく発表するか、また、ただP.O.を学ぶのだけではなく、実際にP.O.を使って何をするかということを学ぶことがでてきたので、社会人になった今、とても役に立っています。

（新潟セラックス勤務 渡部康）

御元気ですか。学生のころはお世話になりました。7月1日をもつて正社員になりました。

現在はエアコンの製品学習や営業の見積、パソ

コンの操作など勉強が非常に大変な状態です。
会社によつやく電子メールがはじりましたので、連絡までで今日は失礼いたします。

（富士電機総設勤務 林 公市）

ここにちは、清水です。

部長がメールすると書つておひまで、もうじ存知かも知れませんが、配属の辞令を受けて5月

18日から東芝の青梅工場に勤務しています。遠い配属されて一週間しか過ぎていないのじ、まだ何もわからぬですけど、なんとか病氣にもなります元気にやつてます。一人暮らしにもだいぶ慣れました。こちらに来る用事があつた時には、ぜひいらっしゃつて下さい。

7月26日(日)から8連休で新潟に帰るつもりなのですが、お元気から行くかも。

ではでは、お元気で。

（東芝システム開発勤務 清水 公春）

現在、私は第一印刷所の営業開発部に所属しています。毎日、パソコンの前に座つて仕事をしていますが、環境的には在学時代とさほど変わらない、といつたところでしょうか。

まだ入社したばかりなので、状況的には自分の方向性を試行錯誤していく段階かな、と自分では思つています。

学生であった頃に私が感じていた社会と実際の社会の様子は少し違つ様です。

いまは手探りのようにP.O.(?)生活を送つていますが、ほかにもいろいろなことを感じるといつます。

（第一印刷所勤務 北原 理恵）

昨年度情報文化学科卒業生で現在韓国の延世大学語学堂で韓国語を学んでいる小林江里奈さん

がこの度韓國外国语大学大学院修士課程(日語)

日文学科語学系)の入試に合格しました。

また、情報システム学科卒業生で、本学研究生の三條知美さん(慶應義塾大学大学院修士課程(理工学専攻))の入試に合格しました。

ホームページの刷新

このたび、本学のホームページを刷新しました。今までは一部の教職員のパソコンによって、主に学内向けに運営されていましたが、それを今回大学の公式な公報メディアの一つとして充実させるようにしました。今後WEBを通じて、学外へとまたまな情報を発信していく予定です。

そのためまずHomepageを設け、そこに

特に重要な出来事やお知らせを随時載せていくことにしました。たとえば公開講座のお知らせなど、通常の大学に必ずある項目だけではなく、本学の各種クラブの活躍などもこのHomepageに入れていきます。また学友会のホームページや卒業論文データベースなどをトップページにリンクして、学生の活躍ぶりの一端が分かるようにしました。本学の卒業生や父兄の皆様だけでなく、本学の受験を考えようとしてこられる受験生にとっても、大学の雰囲気が分かることで、よりよき参考になれるものとおもいます。

今後、さらに充実したページ作りを進めていきたいとおもります。是非本学のホームページをご覧になって、さまざまな意見をお寄せください。お願いします。

(本学ホームページに関するご意見・ご提案は、usui@nus.ac.jp,takenami@nus.ac.jp)へお願いします。(広報委員会)



URL:<http://www.nuis.ac.jp/>

AFS留学生との交流

11月9日から13日までの1週間、AFS新潟支部からの要請でAFS留学生(総合的品質管理)はだいをえていかねばならないか、について講演した。また、同大学の産業工学科の学生(アフリカ4名、アメリカ2名、ドイツ、タイ、コスタリカ各1名)が、本学において学生パートナーの協力のもとに、授業・演習の参観・パンソノ実習への参加、学生と交流等の体験学習を行った。AFSのひとが世界各国で高校生や教師の交換留学など、さまざまな異文化交流事業を実施している国際的な民間団体であり、現在、世界55の国と地域が加盟し、約10万人のボランティアにより年間1万人の交流を実施している。AFS日本協会では、現在20数か国から約300人の高校生を受け入れ、またそれらの国へ校生を受け入れが少ないという指摘もある。



情報文化学科蔡建国教授は、8月20日から24日に開かれた中国史学会と北京大学共同主催の「戊戌维新百周年国際シンポジウム」において研究発表した。また9月19、20日上海で、中日共催の「現代中國構造変動と中日関係国際学術討論会」で同会を行った。9月21、22日上海社会科学院主催の「中国都市発展と社会経済国際シンポジウム」に「メルニアを務め、また、上海社会科学院の特約教授として、当院設立40周年の記念行事にも出席した。

【蔡教授が国際シンポジウムで発表】

ための総合品質と情報」であり、鷲尾教授は「Innovation of TQM/TQC」と題し、今後もひいて国際競争のなかで、これからTQM/TQC(総合的品質管理)はだいをえていかねばならないか、について強化していくかねばならないか、について講演した。また、同大学の産業工学科の学生(アフリカ4名、アメリカ2名、ドイツ、タイ、コスタリカ各1名)が、本学において学生パートナーの協力のもとに、授業・演習の参観・パンソノ実習への参加、学生と交流等の体験学習を行った。

情報文化学科蔡建国教授は、「イーベル賞ともいわれるワールズ賞の授与式である。今年の受賞者は、T・グロウワー等欧米の数学者4名で、その内容は、解析、代数の諸分野にまたがり、当初のうわさ通りのものであった。かつて日本では3名の受賞者を出しています。また、多くのセッションにわたり、レクチャー、討議が行われたが、ナチスの過去(ダヤ系数学者の追放144人に及ぶ)から脱却するべく、この会議によせるドイツの熱意は、相当なものであった。

【原口教授、西アフリカで調査】

情報文化学科原口武彦教授は、文部省科学研究費補助金(国際学術研究)によって編成された調査団の一員として9月5日から22日、西アフリカのコートジボワール、フランスを歴訪した。現地では、資料収集、聞き取り調査を行うと共に、「コートジボワール国立大学との共催のセミナー」、「アフリカの政治的民主化と部族」、「コートジボワールの事例」と題する研究発表を行った。

【知識ベースンワードアート国際会議】

情報文化学科樋口光明助教授は、9月1日から11日にスロバキア共和国で開かれた第3回知識ベースンワードアート国際会議に出席した。この会議は、主として西東欧と日本の人工知能関係の研究者が中心になって、2年に一度開催されている。発表された内容は、「自動ソートワードデザイン」、「ワードアートパラダイム」、「知識獲得」まで、かなり広い範囲であった。

【永井教授がパネリスト】

11月20日(金)、ホテルイタリア軒において、新潟市ソフトウェア産業協議会主催の「情報化ワードアート国際会議」に、情報システム学科永井教授が、パネルディセッショントークセッション(社会の可能性と課題)が開かれた。本学非常勤講師の原敏明氏(新潟経済社会リサーチセンター理事)の基調講演、「インターネットが創り出すエンターテインメント・インターネットの世界」につき、情報システム学科永井教授が、パネルディセッショントークセッション(新潟から世界へ世界から新潟へ)、「インターネットとこれからの取り組み方」のパネリストを勤めた。

教員の活動

【鷲尾教授が韓国で招待講演】

韓国の江南大学(江南大学、ソウル郊外)の設立50周年記念行事として国際シンポジウムが10月に開催され、日本から情報システム学科鷲尾泰俊教授が招待され基調講演を行った。

【松崎教授が国際数学者会議に出席】

8月19日から21日までベルリン工業大学で開かれた国際数学者会議に、情報システム学科松崎奈岐教授が出席して多くの数学者と交流した。96カ国から凡そ5000人の数学者が集まった。4年に一度開催されるこの会議での大きなイベントは、数学のノ

韓国語修習記

恨(ハン)の文化~
韓国・全北大学での
韓国語研修

情報文化学科4年

● 長谷川 竜治

私は7月27日から8月8日までの12日間、韓国の全北(チヨンブク)大学で開催された韓国語研修に参加した。これは全北大学が主催し、日韓文化交流基金が後援するもので、研修には日本各地の15大学から33名の大学生が集まつた。本学からは私の他に、情報文化学科4年の野崎愛さん、川上洋子さんも一緒に参加した。

全北大学は全羅北道の全州(チヨンジュ)にある国立大学だ。この研修では、午前に会話と特別講義、午後も5時半まで韓国の文化体験(陶磁器作りや、仮面劇鑑賞など)と、びつちりと勉強する。さらに、夜は韓国人の学生たちと学外へ行き、夜の韓国語研修(?)をみつちりと積んだ。中でも、夜の研修が楽しく一番身についた。

研修中、私は「ハンの文化」について感じることがあつた。ハンとは韓国語で恨みのこと、韓国は「ハノの文化の国」ともいわれている。この言葉は知つても、若者の間ではもう希薄になつてゐるだろうと思つてひた。しかし、そつではなかつた。

友人にムルツケという学生がいた。彼はアルバイトで大学の寮の管理人をしていて、一緒に飲みに行く約束の日、ちょうど寮の知人の誕生日と重なり、彼の誕生会があつた。この知人とムルツケは友人だったので、私は彼が「一緒に飲もう」と言つたのはこの集まりと思つた。しかし、ムルツケは来なかつた。翌日、彼は「約束を破つた」といつて怒つた。私がどんなに謝つても、彼は怒つたままだつた。すると、彼は突然「これから飲みにいこう」といつた。時計を見れば、午後11時半。それから朝の5時まで外で飲み、歌つて、さ

らに寮で飲み続けた。この時ムルツケは、「韓国にはハンの文化がある。ハンとは単に恨むだけではなく、情の裏返しである。情があるからハンが生まれ、恨んで、恨んで、恨んだところから情が生まれる」とボソリと言つた。これ

はムルツケの持論かも知れないが、私の心にはズーント響いた。この瞬間、「ハンの文化」の実像に触れたと思った。

私はムルツケの持論かも知れないが、私の心にはズーンと響いた。この瞬間、「ハンの文化」の実像に触れたと思った。

トコロが本番になると、今までの心配事はどうへ行つたのだろうかと思えるくらいに全員が自信に満ちあふれた、迫力のある演技をしているのである。その素晴らしさは、声も発音も全てにおいて練習以上の力を發揮しているのである。戦闘シーンでは、ステージを飛び出しての演技が観客の方々を次々と魅了していつたといふ手応えがあった。

公演終了後の話では、我々の台詞が中国人留学生に理解してもらえたようである。私達の中国語がネイティブの人々に通じたこと、そして何よりも、公演直後の挨拶でのお客様からの温かい拍手は、今でも忘ることの出来ない最高の贈り物となつたのである。

中語公演記

アジア文化祭
での劇公演を
終えて

情報文化学科3年

● 三富 勇樹



技指導にも熱が入る。そこには一つの目標に向かい稽古に励む仲間の姿、学年を超えた協力が生まれ、お互いに役づくりや演技、剣の振り方についても話し合い、より素晴らしい劇を目指して力を合わせていた。

いざ本番当日を迎える最後の台詞合わせの時、多くの人が緊張からか台詞が流暢に言えなかつた。大丈夫なのかと心配が募るが時間は待つてくれない。衣装に着替え、舞台への道のりで人々の視線が集まつていくと緊張感は頂点に達した。さあ本番の時が来るのである。

トコロが本番になると、今までの心配事はどうへ行つたのだろうかと思えるくらいに全員が自信に満ちあふれた、迫力のある演技をしているのである。その素晴らしさは、声も発音も全てにおいて練習以上に力を發揮しているのである。戦闘シーンでは、ステージを飛び出しての演技が観客の方々を次々と魅了していつたといふ手応えがあった。

公演終了後の話では、我々の台詞が中国人留学生に理解してもらえたようである。私達の中国語がネイティブの人々に通じたこと、そして何よりも、公演直後の挨拶でのお客様からの温かい拍手は、今でも忘ることの出来ない最高の贈り物となつたのである。

湧

YUUGEN

編集後記に代えて

広報委員長 竹並 輝之

夏休み以降、本学では地域に開かれた大学を目指して、



地域交流イベントに多くの人々に参加していただけたために、広報委員会ではいろいろなメディアを使って広報活動をしました。初めてのことであり、どのような効果があつたのか不安でしたが、公開講座の参加者30名にたずねたところ、次のような結果が得られました。公開講座を知つたのは、車内ポスター10名、チラシ4名、市報5名、新聞2名、インターネット1名、その他3名。これらを参考に地域の方々に新潟国際情報大学を理解していただき、そのため、より効果的な情報発信活動を考えていきたいと思っています。

本号では、学外実習体験記を特集しました。最近、インターナショナルという呼び方で、在学中に社会を実験することが望ましいと文部省も推奨していますが、本学情報システム学科では、開学以来地域企業の協力を得て、3年夏休みに学外実習をカリキュラムに組み込んできました。学外実習を終えた後机上で勉強してきた授業の意味が実感でき、授業に興味が出てきたという学生も多く、勉学意欲の向上や進路の決定により効果を与えていると思います。もっと早い時点で学外実習を体験したかったという声も聞こえています。